姉妹庭園締結

（財）北方文化博物館―箱根財団（サラトガ市　米国）

土沼 隆雄

新潟日報掲載記事

新潟日報
2011年(平成23年)12月14日(水曜日)

新潟市江南区の北方文化博物館と、米国カリフォルニア州サラトガ市で日本庭園「箱根庭園」を管理運営する箱根財団が、「姉妹庭園」の関係を結んだ。国境を越えた日本庭園同士が姉妹関係になるのは世界的にも珍しいといい、関係者は「互いに行き来するだけでなく、技術、教育交流の観点から友好関係を深めたい」と期待を寄せている。

北方文化博物館と米サラトガ・箱根財団

国境越えて姉妹庭園に

相互訪問、技術支援へ

仲介の造園家「奥深さ再認識を」

姉妹庭園の締結書に署名、握手を交わす北方文化博物館の伊藤文吉館長（右）と箱根財団の松尾正人理事長＝米国サラトガ市の箱根庭園（土沼隆雄さん提供）

箱根庭園は大正時代の1917年、日本文化に魅了された米国人資産家が日本から庭師を招き、約6万7千平方㍍の土地に12年かけて築庭した。回遊式で飛び石を配置するなど本格的な日本庭園。日本でいう重要文化財でもあり、現在はサラトガ市に代わり、箱根財団が管理運営に当たる。

姉妹庭園の締結を仲立ちしたのは、新潟市中央区の造園家、土沼隆雄さん(58)。土沼さんは2006年から箱根庭園のアドバイザーを務めている。北方文化博物館の伊藤文吉館長と、館長を知る現地の関係者双方と面識があったことから、仲介役を買って出た。

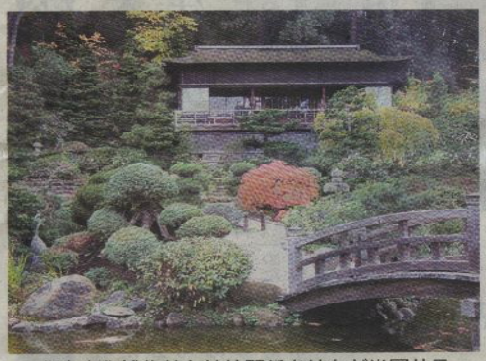
サラトガ市長を含めた庭園関係者約30人を昨年、北方文化博物館に招き、人広間に面した庭園を案内。その後、交渉を重ねてきた。

先月17日、箱根庭園で伊藤館長と箱根財団の松尾正人理事長が締結書に署名した。

今後は市民レベルで互いの庭園を訪問する交流や、造園技術の支援、ガイドの養成などを行っていく予定。

伊藤館長にとってもサラトガ市は思い出深い場所だという。「40年くらい前、アフリカで知り合った米国人がサラトガの出身だった縁で、3年ほど生活した。その場所にある庭園と長い時を経て姉妹関係を築けることは感慨深い」と語る。

土沼さんは「日本庭園には人と自然を一つにする力がある。姉妹関係によって互いのオリジナリティーも学べて切磋琢磨できる。日本人自身が忘れかけている日本庭園の奥深さを再認識するきっかけになればいい」と力を込めた。



北方文化博物館と姉妹関係を結んだ米国サラトガ市の「箱根庭園」（土沼隆雄さん提供）

姉妹庭園締結の経過

庭園同士の友好関係については、箱根庭園の将来における基本計画（Hakone Garden Master plan：Donuma 2006）で「姉妹庭園関係の締結」意義と重要性を指摘し、以来、多方面にわたり調整を行ってきましたが、このたび、箱根理事らの理解とサラトガ市民の皆さんの後押しと協力で、「(財」北方文化博物館：新潟」と「箱根財団：米国」が、11 月１７日に姉妹庭園関係の締結を行いました。

「北方文化博物館」については国指定の名勝庭園などを所有している新潟でも屈指の財団であり、名実共に格のある財団であります。箱根財団もアメリカで 90 余年もの歴史を持つ歴史庭園です。

博物館の館長伊藤文吉さんは日本を代表する文化人で、新潟の巨大地主「豪農」の家柄で、若いころは 1 年の半分を海外で過ごされたほどの国際人でもあります。過去にサラトガ市に 2 年ほど滞在された経験があり、市民の方々に知り合いも多く、伊藤さんを知る市民の皆さんの後押しで締結がなされたと言っても過言ではありません。

昨年、サラトガ市の皆さんの思いが募り、市民と理事さんら総勢 30 人が新潟の地を訪ね、伊藤さんとお目にかかり、庭園も観ていかれました。このように市民主導で姉妹庭園締結が進められてきました。

今後は、まずは組織内の人々による技術と教育の観点から情報交換を行い、徐々に市民の皆さんにも参画していただき、さまざまな交流を通じて着実にその成果を上げていきたいと考えています。

姉妹庭園締結の意義

現在、日本では 1578 の姉妹都市関係が諸外国間で締結され、そのうち約 7 割の関係において日本庭園が構築され、今、日本庭園は国同士や都市間の友好と親善の場として国際舞台で大きな働きをしています。

（財）北方文化博物館（新潟市江南区）は、箱根庭園（箱根財団：カリフォルニア州サラトガ市、米国）と教育及び技術的な交流事業を通じて、両者の組織メンバー間における相互の友好的関係理解をもとに、会員や多くの市民参加も呼び掛けながら両国文化の理解、そして友好関係を構築し促進したいとのことから数年来、関係構築を模索してきました。

両財団は、この交流関係で庭園を運営する組織として共に進化し、文化プログラムの発展に寄与すること、そして米国と日本の文化の相互理解を促進することなどを確認し、2011 年 11 月 17 日、姉妹庭園関係を締結しました。

今後、他の公開日本庭園でも、このような国際間の提携もしくは国内においても姉妹庭園関係が活発化され、一般市民に対する庭園理解に努め、組織や制度、管理運営上の課題を共有する広域的ネットワーク化が期待されます。

これからの日本庭園が目指すもの

日本庭園の本質　日本には、素晴らしい庭園が数多く残っています。歴史的･造形的にみても質の高い庭園文化を築いてきました。少々生真面目（きまじめ）な作風ですが、作り手も所有者もその時代その時代を一生懸命に生きてきた、その足跡をみる気がします。そして自らが楽しむためだけでなく、時には飢饉に苦しむ農民救済のために、時には庭園技術と思想の継承のために私財を投じて庭園を造りました。自然を見つめ、我（われ）を見つめ、究極的には自然と我を一体化させる。そんな崇高（すうこう）な精神性と豊かな感性が独特の「美の庭」を表現してきたのです。

ところで、庭園には二つの所有形態があります。一つは庭園そのものを身近につくること、もう一つは庭園に出かけていくことです。これからの時代は、益々庭園に出かけて行き、その美しさに感動し、我が庭のように庭園を楽しむことが主流になるでしょう。

さて、現代流に言えば、庭園とは、ゆったりした気分で眺めることが楽しい、人と語り合うことが楽しい、学ぶことが楽しい、育てることが楽しい、などなど楽しいことがギュッと凝縮して積み重なった「生きがい」や「やりがい」の場であって欲しいものです。

庭園の本質とは、庭園の形そのものではなく、「人と庭園との関係の本質である」と思います。よくよく考えてみれば、庭園は庭園だけで成立するものではなく、必ず傍らに人がいて、人と庭園の豊かな結びつきがあったわけです。

庭園と我々人間との本当の関係とは何か、それを結ぶ手段としての庭園の再発見。今、もう一度このような観点から庭を見つめてみたいと思います。

これからの日本庭園　　日本庭園が持つ、人と自然を一つにさせるチカラ。このチカラが世界でさまざまな理由で病んでいる人の心を癒せたらどんなに素晴らしいでしょう。

日本人の持つ自然観はやはり独特であり、日本庭園は究極的には、自然に抱かれる人間そのものを生み、育んできたのではないかと思うようになりました。どんな人でもその人が求める満ち足りた世界を心に抱くものです。ジーンとくる深い感動もそこにあるように思います。

今、世界では心を閉ざし、感動のカケラすら味わうことなく闇の世界をさまよっている人たちが大勢います。こういう人たちと向き合った、本当に「心が解き放たれた自然の世界」にこそ、これからの日本庭園の存在価値があるように感じます。

日本庭園の持つ思想性や美の世界で全てをやれるわけではありませんが、少なくとも、このようなことに気づき、新しい時代の新しい日本庭園の価値と進化に期待したいと思います。

箱根庭園の概要

1915 年、サンフランシスコの富豪オリバー、イザベル・スタイン夫妻は、当地で開かれたパナマ太平洋万国博覧会で日本文化に大変興味を持ち、翌年、日本を訪れています。箱根の風景、とりわけ富士屋ホテルの歴史を感じさせる重厚かつ荘厳なたたずまいと手入れの行き届いた日本庭園に魅せられた、と言います。

帰国後、夫妻は日本から宮大工、庭師を雇い入れ、庭園築造を開始。「箱根庭園 Hakone Garden」と名付けました。1917 年に建設された書院風別荘（月見台）は、書院造りと数寄屋造りを融合させた日本式家屋で、書院には床の間や引き戸、違い棚を設え、数奇屋には加工を避けた自然素材を使用し、最小の装飾でつくられていて軽やかさが強調されています。庭園は池泉廻遊式で、主景は中央の池と南側斜面の山筋から水を落とした滝流れ。築山の形状や滝石組み、景石の配置、飛石の打ち方など随所に伝統庭園の手法が施され、ともに明治時代の巧みな庭園技術・建築技法をみることができます。

箱根庭園は、現在、箱根ファンデーションによって管理運営されており、北カリフォルニア地域で日本文化の発信基地としての役割を担っています。その一つ、文化活動では、シリコンバレー在住の日系人や企業を中心に結成された「箱根庭園支援の会」の協力で、毎年 5 月に箱根祭りが開催されています。生け花展示や茶会、少林寺拳法の実演のほか、在米日系企業によるパソコン、日本往復航空券、デジタルカメラなど豪華賞品が揃うオークションなども行われ、その収益金は全て箱根ファンデーションに寄付されるなど、庭園を地域で支える体制が確立しています。

2003 年にはアメリカ合衆国の重要文化財に登録され、益々、歴史的価値を上げています。また、2005 年、スティーブン・スピルバーグ監督のハリウッド映画「SAYURI」の舞台にもなり、多くの人に注目されることになりました。

箱根庭園の歴史（箱根庭園の形成過程）

箱根庭園（1917－1929）は、誕生から 90 年余の歴史を経て現在のその姿をとどめています。なぜ「箱根庭園（Hakone Gardens)」という名前なのかについては、当時、庭園築造に際して、創始者イザベル･スタイン氏らが日本の箱根地方を訪ねて、いたく感激をしたことが伝えられており、ここから命名されたのではないかと思われます。

庭園の主景の 1 つは南側斜面の山筋から水を落とした滝で、庭園全体は池泉回遊式庭園で築山の形状や石組み、景石の配置、飛石など伝統庭園の手法が随所にみられ、また高台には上の茶屋：別荘風の書院:月見台(1917)が造られており、明治時代の日本職人の技を見ることができます。

1915 年、サンフランシスコ芸術の良き理解者であり、後援者だったオリバー、イザベル・スタイン（Oliver and Esabel Stine）夫妻は、夏を涼しく過ごす別荘を建てるためにサラトガ山の中腹に約 17Acres(67,000 ㎡)の土地を購入しました。

スタイン夫人と長男ジョンは 1915 年に行われたパナマ太平洋博覧会での日本展示に刺激を受けて、その翌年に日本を訪れ、特に富士箱根国立公園を訪れて感動されたようでした。

スタイン夫人は、サラトガ市に戻るとすぐに庭園築造に着手し、1917 年、大工･新谷常松氏（和歌山県出身 1877 - 1921）を雇い入れて、敷地の中腹に日本建築・上の茶屋「月見台」(1918）を建設しました。この建物は数寄屋造りと書院造りが和合しており、当時の建築技術で造られています。また同時期に庭師･相原直治氏(1870 - 1940)を雇用し日本庭園築造を開始しています。なお、現在あるもう一つの古い日本建築である下の茶屋は 1922 年（1980 年に内部を改造）に建築されています。

さて、いくつかの変遷を経て 1932 年に庭園の所有権は、近在の資本家Ｃ･Ｌ･テイルデン（C.L.Tilden）氏に移りました。この頃、西浦新三郎氏（奈良県出身）に

よって正門（山寺風）を庭園内に建て、庭園に造詣があった中国系アメリカ人などとのパートナーシップにより運営を図ったものの庭園は序々に荒廃したため、1966年、サラトガ市が解体・分譲と乱開発から庭園を守るためにこの庭園を購入して公園としました。この頃、当時の市長チャールズ・ロビン氏は安井清氏（後に箱根庭園に尽力）を京都に訪ねて箱根庭園の改修と維持管理について相談をしています。

また、この頃、サンマテオで個人住宅建設のため訪れていた安井氏は、サラトガ市の公園課職員として箱根庭園を管理していた石原淡草氏と出会っています。石原淡草氏（九州出身）は京都で庭を学んだ庭師で、1968 年、サラトガ市の職員として庭園の手直しをはじめており、椿山や山道などはこの頃整備されたものです。

その後、安井氏は茶室・伝統建築の専門家・中村昌生博士を連れて箱根庭園を訪れ、箱根庭園について意見を述べています。その中で中村先生は「アメリカ西海岸で苦心された大工技術と庭園の手法が良く分かり、そのままの状態で現存している歴史的にも保存すべき価値を有する庭園」と評価され、後に石原氏は著書「HAKONE GARDEN： Tanso Ishihara and Gloria Wicknam：1974」を出版していますが、1980年に石原氏は不慮の事故で亡くなっています。石原氏の後任として、1976 年から市職員として箱根庭園で働いていたジャック・トムリンソン氏は、1980 年、庭園管理責任者として着任しています。

文化交流関係では、1980 年、日本竹の会（会長上田浩一郎氏）サラトガ支部が結成された。1981 年、ジャック・トムリンソン氏は西山ロータリークラブ（京都）とサラトガロータリークラブの交換留学生として嵯峨野の庭師椹木信太郎氏宅で2 ヶ月間、そして翌年 1982 年の二回、庭園の実地指導を受けており、また、安井氏の尽力で 1984 年に京都・向日市とサラトガ市は姉妹提携を結び、交流を始めました。

箱根庭園はサラトガ市の所有ではありますが、同 1984 年に箱根財団を設立して組織として独自の管理運営に着手し始めるますが、肝心の資金面では高所得者、高級住宅地であるサラトガ市にもかかわらず、思うように寄付金が集まらず、運営は

ボランティアが中心でした。

1987 年には安井氏らの協力で向日市在住の職人たちによって竹庭「絆園」：姉妹都市記念庭園が築造され、交流も徐々に回数を重ねて盛んになり、米国竹の会も結成されました。この頃、芸術文化交流の一環として象嵌の第一人者今井政之氏（広島県竹原市）の作陶講演や陶芸家・ロバート岡崎氏（中里太郎衛門の娘婿）の作陶展が開催されています。

1990 年には篤志家・永井盛人氏（愛知県犬山市）の多額の寄付によって京都八幡市にあった民芸茶屋が文化交流会館:CEC として庭園内に建設され、また 1994 年には永井氏、安井氏によって茶園が造られています。

1996 年、サラトガ市民の増税反対及び市政の予算縮減により箱根庭園の運営費予算が大幅に削減され、1997 年、箱根庭園はサラトガ市の公園という位置付けが無くなり、サラトガ市に代わって箱根財団がその運営のすべてを任されました。そして 1999 年に箱根財団は、Executive Director（常勤取締役／CEO）としてロン・サバドラ氏を迎え、将来を見据えた新しい視点からの管理運営と財源確保のための体制づくりに着手しました。

1999 年には、日本竹の会国際情報誌に「The Story of Hakone Japanese Gardens in Saratoga, Ca,USA ：Jack Tomlinson」が掲載されました。2000 年には、サラトガ市と箱根財団との間で 55 年間の建物リース契約を締結し、2003 年にはアメリカ合衆国の重要文化財：The National Trust’s Save America’s Treasure に登録され現在に至っています。

箱根庭園の形成過程の歴史年表（日本との交流、支援に関する記述）

1964 年	安井がサンマティオ市・山内好子「桂の院」計画のため渡米、石原淡華と会う。（安井清） 京都市役所に山田善一市会議員と共に訪日されたサラトガ市長チャールス ロビンと箱根庭園の実情と将来の計画の相談に応じる。（安井清）
1968 年	日本庭園と日本家屋を一層引き立てるために丘の中腹に椿山を造ることを指示する。（安井清）
1975 年	樋木信太郎と箱根庭園で竹の移植・庭の手入れについてサンフランシスコ湾近在の庭園に関係する市職員と共に講習会を開く。（安井清）
1978 年	京都・乙訓ロータリークラブからサラトガロータリークラブを通じて箱根庭園に灯篭一基（西野屋型）を寄贈。（安井清）
1980 年	竹の会サラトガ支部（日本竹文化振興会）会長に Bruce Parkinson が就任。 石原淡華氏が宮崎県の実家に帰省中に急逝、日向市の葬儀に列す。（安井清）
1981 年	Jack Tomlinson は樋木信太郎氏に師従して庭園技術を習得する。（安井清）
1984 年	安井氏が箱根財団設立のために渡米し、会長の William Glennon 元サラトガ市長や David Moyles 元市長と共に箱根庭園に尽力する。この頃マスタープランも作成される。向日市とサラトガ市が姉妹都市盟約に調印。（安井清）
1987 年	姉妹都市を記念して、河原造園、小川造園、民秋造園により「紳園」が作庭される。サラトガ市と永井盛人との間で経過報告と支援を要請。（安井清・永井盛人） 10 月交流会館建設現場視察。（日米文化交流会館建設の調印を行う。（安井清・永井盛人）
1988 年	文化交流会館建設に向けて相互交流会を開催。（安井清・永井盛人）
1989 年	交流会館建設の打ち合わせ会を行なう。（安井清・永井盛人）
1990 年	箱根庭園にて地鎮祭を行なう。（大岩上人・安井清・永井盛人）
1991 年	2 月サンフランシスコ日本総領事館安井清・永井盛人）
1992 年	4 月会館の化交流会館の竣工式。William Kohler,Mayor／Norman Mineta／Atsushi Tokinoya／Donald Miller 他多数列席の中で盛大に行われる。（安井清・永井盛人） 11 月日米文関係者を招いて慰労会を開催。会館がオープンする。（安井清・永井盛人） 1993 年 6 月会館の主な点検を行ない、お茶の資料館を整備する。（下智・永井盛人）
1994 年	2 月第二回お茶の根交流会・三重県のお茶の種 2,270 粒郵送にて贈呈、Jack Tomlinson に種を蒔いてもらう（永井盛人） 11 月第一回名古屋豊茗会による日本のお茶の講演・（松貴う。（松下智・永井盛人） 10 月第三回お茶の根交流会・名古屋邦楽お囃子の鳴和会による演奏会。（永井盛人）
1995 年	1 月第四回お茶の根交流会・大山市にて市主催にてサラトガ市文化交流訪日使節団歓迎会とお囃子の演奏（松山邦夫他・伊和家小米他・永井盛人） 11 月第五回お茶の根交流会・京都西川流日本舞踊による。（西川充氏他・永井盛人）
1996 年	2 月第六回お茶の根交流会・京都府立茶業研究所からお茶の苗木（品種:こまかげ／やぶきた 100 本）の贈呈と植樹。（片山茂・永井盛人） 6 月第七回お茶の根交流会・名古屋豊茗会によるお茶会と茶の来歴展示。（松下智・永井盛人他）
1998 年	4 月第八回お茶の根交流会・箱根庭園の主な関係者と交流会。（永井盛人）
1999 年	3 月第九回お茶の根交流会・元日本国首相細川護熙による講演会。（細川護熙・安井清・永井盛人）
2005 年	10 月第十回お茶の根交流会・サンフランシスコ総領事中村茂氏主催の箱根庭園を支援する会に出席 日米友好 150 周年記念にあたり中村茂総領事・安井清・永井盛人の三名に感謝状がサンフランシスコ州議会より贈呈される。永井から総領事を通じて箱根財団へ 1，000 米ドルを寄付。（中村茂・安井清・永井盛人他）
2005 年	箱根庭園の今後について土沼隆雄(新潟県)に委嘱することになり、箱根財団と連携を取りながらその価値を高めて行けるようにと新たな動きが始まる。The National Trust's Save America's Treasure に登録される。
2006 年	庭園調査とヒヤリングを実施して箱根庭園の将来を描いた「マスタープラン」を土沼が完成させる。 以後、このマスタープランによって計画的に箱根庭園の庭園修復及び管理運営体制ができつつある。

以上、今まで 40 年余りに渡り、主として安井氏、永井がボランティアとして行なってきた箱根庭園の文化交流の一端です。
ここまで奉仕の精神でご尽力していただいた多くの方々に感謝いたします。
本来ならば、ここに皆様のお名前を記すのが当然のことと思いますが、どうかその失礼をお許しください。

文責：永井盛人、土沼隆雄

旧伊藤家庭園（北方文化博物館）

写真-１．旧伊藤家庭園（北方文化博物館）

伊藤家は250年以上続く旧家で代々文吉を名乗り、現在は8代文吉氏である。代々百姓を受け継いできたが、4 代目辺りではすでに豪農の素養が見え始め、地租改正後の5 代目あたりから金融商家業の体裁も整い、広大な土地を集積するようになりました。明治25年に630町歩、34年1000町歩、大正13年には1300町歩の豪農となっていました。庭園は田中泰阿弥によって改修され、現在の姿になっています。鉄製の灯篭「天正元年、与次郎作」や小町灯篭（鎌倉期と推定）、織部灯籠、朝鮮灯籠、井筒、つくばい（加茂川石、佐渡看亭脇）鞍馬御影石など名品があります。茶室は表千家の不審庵を模した積翠庵（与板から移築）、是空軒、小亭いわのや、佐渡看亭など。庭園は伝統形式、池泉回遊式の京都風の庭園で、昭和28年から5年の歳月をかけて作り上げた風景美豊かな新潟を代表する庭園です。

清水園（旧新発田藩下屋敷庭園） -平成15年8月五十公野御茶屋庭園とともに国指定名勝-

新発田市街のほぼ中央に位置している清水園は、かつて十万石の大名新発田藩主溝口家の下屋敷でした。新発田川にかかる小さな橋を渡り、すぐに威風堂々とした表門を見上げる。目前につづく敷き砂利の園路を進むとアカマツの間から差し込む木漏れ日が心地よい。直線的な園路を歩き始めた中程に庭門があります。これは京都・藤村庸軒、淀看の席、庭内から移設されたもの。ここを潜ると下界とは全く異なる幽玄の世界。砂利敷きの分かれ道を右手に折れ、小さな石橋を渡ると書院表座敷前に出ます。ここ書院前からの眺めは驚くほど雄大で、しかも静寂そのもので、目を見張る美しい風景です。

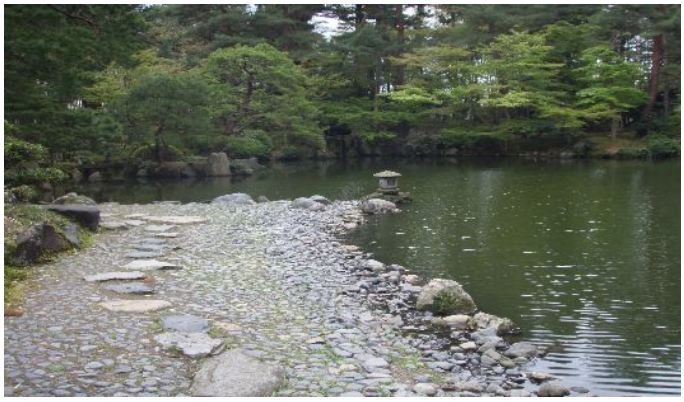


写真-２．清水園庭園

この庭園は、池を中心に配置されたさまざまな景色を歩き廻りながら楽しむ江戸時代の大名庭園の形式・池泉回遊式庭園で、日本中の美しい自然や名勝を集めて理想世界を演出したもの。池の形状は、草書体の「水」という字をなしているというが、日本を代表する美しい風景・琵琶湖の形を模しており、唐崎の松、瀬田の唐橋など近江八景をモチーフに庭園が構成されています。

庭園内には入り江、そこを通り過ぎると汀の線に沿って州浜、岬、島などがあり

ともに海の風景を表現しています。また、園路伝いに庭園の景色は徐々に深く暗い渓谷の世界へと変化していき、心地いい滝の水音が聞こえてきます。庭園内には桐庵、夕佳亭、翠涛庵、同仁斎、松月亭といった茶室があり、これらの風情がより一層庭園を引き締め、秩序美を湛（たた）えています。

庭園は四代・重雄（1633～1708）によるもので下屋敷完成後、幕府庭方の縣宗知（1656～1721）によって築庭されました。昭和 28 年から 31 年にかけて田中泰阿弥により本格的な改修が行われています。

五十公野御茶屋庭園

新発田藩初代藩主・溝口秀勝（1548～1610）が入封（国替え）の際に仮住まいを構えた場所。後に三代・宣直（1605～1676）は三万四千坪の敷地に別邸をつくり、四代・重雄の時代に縣宗知によって庭が造られました。

その後、歴代藩主の参勤交代の行き帰りの休息の場として利用。庭園は裏山（御腰掛山）を借景に取り入れ、心字池を中心とした廻遊式で、周りに緩やかな築山をめぐらしたおおらかで趣のある庭園です

DRAFT HAKONE GARDEN MASTER PLAN

SARATOGA, CALIFORNIA, U. S. A.

September, 2006

TAKAO DONUMA, PhD

2. Partnerships

2-1. Relationship with Japan

Throughout the long history of the Hakone Gardens, very many Japanese people, organizations, groups and sister cities have had relationships with it in a variety of forms, thereby supporting its cultural exchange endeavours.

In the future, such relationships should be re-examined and the reasons for the attenuation or cessation of any of these investigated. Moreover, with regard to those that can be maintained and further developed, it is vital to build friendly relations anew. In terms of introducing Japanese culture and providing more profound insights into Japanese gardens at the Hakone Gardens, it will be important to seek and construct new sister garden relationships and build up collaboration with new personal connections and related support groups, thereby developing active relationships of friendship.

2-2. Relationship with the Community

As far as the relationship with the local community is concerned, approaches could include the use of the gardens as a venue for conducting practical study or gaining hands-on experience of the environment or Japanese culture, as part of elementary school environmental or cultural programmes. By conducting this project in collaboration with the programme of guided tours provided by elderly volunteers, it would have the advantage of also contributing to the quest of elders for pleasure and motivation in life.

2-3.Collaboration with Organisations Involving Japanese Gardens Around the World (Friendship)

The initiative should be taken in developing a network that exchanges information concerning topics, issues and problems common to the numerous Japanese gardens around the world. Ahead of this, the Japanese gardens that exist within the USA should first of all become members of each other's organisations, exchanging information and providing support. In the meantime, Hakone Gardens will become a member of the Japanese Garden Society of Oregon (Portland), with a view to engaging in exchange with that organisation. By doing so, it will be possible to discuss problems shared by both organisations and incorporate the results of such discussions into the formation and running of the gardens.

Sister Garden Affiliation Agreement

Between

The Hakone Foundation and Northern Cultural Museum

WHEREAS, the Hakone Foundation of Saratoga, California, U.S.A. and the Northern Cultural Museum, Niigata, Japan hope to promote mutual understanding of Japanese culture and goodwill between the members of our two organizations through educational and technical exchange programs, and

WHEREAS, both organizations are convinced that such exchange programs, in turn, contribute toward development and improvement of their gardens and cultural programs and furtherance of understanding of the cultures of U.S.A and Japan.

NOW, THEREFORE, BE IT RESOLVED, that our two historic cultural centers, with the support of our boards, do hereby agree to establish a Sister Cultural Center Affiliation on this 17th day of November, 2011.

Dr. Masato (Marty) Matsuo	Mr. Bunkichi Ito
Chairman, Board of Trustees	Director,
Hakone Foundation	Northern Cultural Museum

Proposed Educational Programs

* Exchange of publications
* Exchange of newsletters
* Alternating garden visits by members
* Visiting other gardens in the area
* Holding information seminars and discussions

Proposed Technical Programs

* Residency program for teaching and learning gardening skills
* Assistance in strategic and technical planning
* Seasonal plant care and pruning advices

調印

伊藤館長のスピーチ

On the Relationship between the Formation of Historic Gardens and Regional Characteristics, also the Composition of its and Environmental factors in Niigata.

(extract)

Takao Donuma Ph.D.

Northern Culture Museum ：former Ito-tei

The results of the analyzed characteristics:

This paper analyses topographical characteristics of historic gardens in the greater Niigata area with regard to the locations of gardens, the spatial organization of the gardens and other related topics. The salient of this study are as follows:

1. Periods when most of the gardens of wealthy farmers and the like were established and/or expanded coincide with the era of the emergence and development of the landowner class.
2. The locations of gardens in the Niigata area are classified into15 categories, based on economic affluence and natural topography.
3. Few historic gardens of Rinzai, one of the Buddhists acts, are located in the Niigata region.

4. 80 % of the total consists of gardens which made use of water. Such gardens are very common in the plains and mountainous regions. The Hiraniwa(Flat Gardens) style (Roji(Tea Gardens) and Karesansui (Sand and Stone Gardens)) is popular in coastal regions.
5. The Kaiyu style garden (Strolling Pond Gardens), a circular type of garden, is mostly located on floodplain topography, where wealthy landowners resided.
6. There are many front type, backyard type and courtyard type of gardens compare with circular type of gardens in the smaller farmland belt areas of the mountainous regions. It seems that the emergence of circular gardens on the plains was influenced by social factors such as wealth, authority, and social status. The backyard type and the Hiraniwa type in coastal regions seem to have been more influenced by natural factors such as topography, environmental conditions and man's need to manipulate those elements for his survival and pleasure.

1. The result of co-relational analysis on the composed surface ratio (%) and on environmental factors was 14/121($P<.05$).
2. The ratio (evergreen/deciduous:%) is not governed by such specific factors as temperature or snowfall only, but is also affected by the integrated environment of those factors.
3. Regarding the interval dispersion of stones in the gardens (number of stone:%), water (area of pond:%), and trees (number of tree:%), they can be classified into three groups: Large, or less than 1,000 square meters in garden area and designed: middle, or somewhere between large and small, with characteristics of both large and small: and small, with more than 3,000 square meters in garden area and formal.

   A pattern was discovered in the treatment of garden stones (the ratio of scenic stone:%) and the pond shape (the pond shape complex ratio:%). These resemble Kyoto and Edo gardens. The ratio of evergreen is 75.5% and the ratio of deciduous is 24.5%. There is a difference between Kyoto and Edo gardens: 90% evergreen to 10% deciduous.
4. The gardens in coastal regions have many Pinus Thunbergii, and many Pinus Densiflora in plains regions. Both of them are mainly used for scenic trees. Cryptomeria japonicas in plains region are for enclosure, and connected with forest behind the gardens in mountainous regions.

Former Ito-Tei and the Northern Culture Museum

The spacious wooden house contains more than 60 rooms, with a floor space of about 4,000m^2, and built on a site of 29,200m^2, is an example of traditional Japanese architecture. The premises have been preserved quite well since their construction in 1885-1887 and they still show us the dignified simplicity of a wealthy landowner's house of the olden days.

The Ito family was formerly one of the largest landowners in Japan.

Here in this quiet village on the Kambara Plain along the Agano River, Ito Mansion served as their home until 1946,when the Land Reform Act was officially proclaimed and the mansion and all of the valuable works of art they had collected were donated to the Northern Culture Museum, which was established in the same year. Since then Museum has been in charge of the maintenance and exhibition of the property.

The landscape garden lies to the south of the main drawing room. It is a "walking" garden laid out in the traditional style of the Kamakura and Muromachi periods (14th-15th century). Its five tea houses located in different parts of the garden (two of them built later), and numerous natural rocks-mostly from Kyoto-artistically arranged around the pond, give the garden its special character, and the green moss growing on the stones and rocks seems to add to its elegance and dignity. The garden was designed and completed by a gardener from Kyoto after 3 years of work.

History

According to the family tradition, the Ito family began as farmers in this village about the middle of the 18th century. After the Meiji Restoration the family is supposed to have emerged as major landowners.

While Japan was striving for modernization during the Meiji era, the family continued to increase their property holdings that consisted mainly of paddy land and forest.

By the beginning of the Showa era (1920's), they had become one of the largest landholders in Japan, possessing about 1,370 hectares of paddy fields and more than 1,000 hectares of forest. In order to manage this vast property they employed 78 overseers who controlled no fewer than 2,800 tenants. The family also owned about 60 warehouses, which stored 1,800 tons of rice every autumn.

調印後にお互いに締結書を交換

旧伊藤邸の紹介

調印式参加の市民

レセプション

歓談

締結を下支えしてくれた John Tauchi　　Mrs.Tauchi さんと伊藤館長